55

脈学における曲直瀬道三の業績

吉岡　広記
日本鍼灸研究会

【緒言】 江戸前期に流布した脈書に，初代曲直瀬道三（以下，道三と略す）の脈論を編集した『脈論口訣』がある．その内容は多岐にわたるが，とりわけ内外因の弁別という観点から脈法を論じた人迎気口診が注目される．その脈法は，既に道三の『切紙』や『診脈口伝集』に見えるが，さらにその淵源をたどれば，南宋の陳言『三因方』や『脈経』へも遡行することができる．以下，道三の人迎気口診の形成過程と後世の評価について考察し，日本近世の脈学研究史の一端を明らかにする．

【人迎気口診の受容までの過程】 道三は人迎気口診を受容した日本で最初の医家とみられるが，脈診による内外因の弁別という方向性自体は，既に月湖の医学に見いだすことができる．梶原性全（『頓医抄』巻四十一）以来，日本中世の脈学では，『察病指南』を根拠とする，七表八裏九道脈の寸口診ないし寸関尺診（蔵府を候う左右寸関尺診は除外されている理由は不明）が正統とされていたが，月湖は七表脈が外邪を，八裏脈が内因を示す脈状と定義して見せ，脈状によって内外因を分けるという独自の主張を行い（月湖『全九集』巻三・脈略之初の冒頭二論），さらに劉開『脈訣理玄秘要』脈旨綱領に基づき，二十四脈の宗と見なす浮沈遅数四脈を以て風気冷熱を診ることを提唱した（巻三・脈略要之初・九道脈陰陽各別而相交也．診脈部位は示さず，非人迎気口診）．これに対して，道三編著の『全九集』（天文十三［1544］成）では，七表八裏によって内外因を分ける論は首肯しかねたのか，『察病指南』に沿った構成に戻され，また四脈の記述も消されるが，巻一・病ノ内外ノ異において，浮大は外，沈細は内に病有りとした巻三・脈略之奥・内外別を，浮沈にて内外陰陽を診るのみならず，遅数によって寒熱も見極めよとし，月湖の主張をさりげなく継承している．このことは，『全九集』編著当時，道三の内外因と四脈の重要性の理解が未だ不十分であったためか，あるいはよくわかったうえで，師説をなかば奪う形で，人迎気口診の受容へと舵を切ろうする姿勢を示すものなのか，判然としない．後に道三が非人迎気口診の四脈を自著に記す場合には，同文の『医林正宗』を典拠とし（『医学指南篇』三・四脈為祖，『医家用語集』察脈用語・四脈力弁．科疏にて記す），劉開の名を出したのは約 37 年を経た天正九年（1581）の『切紙』四十一においてである．

『全九集』以降の道三は，『三因方』や，『三因方』を摘録し運気論を加えた『丹渓脈訣』『脈訣刊誤』『外科精義』などを読み込む過程で，四脈に虚実（有力無力）を加えた六脈を，左右の人迎と気口で診れば，内外因の弁別が可能であることに着目し，『全九集』から 22 年後の『診切枢要』（永禄九年［1566］）診切博約の中で，人迎気口診と四脈の関係を科疏形式で明解に提示した．ただし，それ以降は，『診脈口伝集』（天和三年［1683］）四脈ノ弁察に同様の記述があるのみで，それ以上の展開がなされた形跡はない．

【門人による否定】 道三に連なる門下の脈書に，『察病指南訓解』（曲直瀬正純）や『察病指南抄』（人迎気口ノ脈の項で「当流専用」とするも，『素問』五蔵別論の王注「気口則寸口也」を挙げ，左手の人迎［人迎穴に非ずとす］も右手の気口も，畢竟，寸口であるから人迎気口診は誤りと暗に示す．最後の「然レドモ……一溪叟専信之」に示唆されている），『脈訣刊誤抄』（曲直瀬玄由）などはいずれも，中世の脈学を支持するものであるし，また後世方派の末流である岡本一抱に至っては，『脈法指南』論人迎気口第一の中で，張介賓と同様，『内経』以来の人迎脈口診が正当という理由から人迎気口診を完全否定し，同書の論男女脈位第六では「近世一ノ脈書［『脈論口訣』］……此書ナカリセバ，此如ノ謬アルコトアラジ」と批判している．しかし，いずれの論も，脈法による内外因の弁別という道三の重要な問題提起からは後退しており，江戸中期以降の日本における脈学の衰退が感じられる．